

吉本隆明とキリスト教

宮 本 孝 二

はじめに

第1節 初期著作と「マチウ書試論」

第2節 1970年代の「喩としてのマルコ伝」

第3節 キリスト教と知識人

おわりに

本稿は、本学社会学部教授でキリスト教学ご担当の滝澤武人先生のご退任を記念した本誌に、先生に深い感謝を捧げ先生の今後のますますのご健勝を願いつつ、キリスト教にかかわるテーマで寄稿させていただいた拙文である。筆者は、2011年に拙著『吉本隆明の社会理論』（宮本，2011）を、本学出版助成を受けて出版することができた。しかしながら、吉本とキリスト教の関連については、その第10章「宗教とは何か」第3節「知識人論としての宗教者論」において若干言及したものの、それはきわめて限定的なものであった。本稿では、その増補改訂を試みたい。

吉本の名が論壇に最初に知られたのは、新約聖書についての論考「マチウ書試論」（吉本，1954）であった。その後も、70年代になって同じく新約聖書を題材にした「喩としてのマルコ伝」（吉本，1978a）を発表し、1992年には『甦えるヴェイユ』（吉本，1992）を刊行しシモーン・ヴェイユとキリス

キーワード：吉本隆明，キリスト教，マタイ福音書，マルコ福音書，
シモーン・ヴェイユ

ト教の関連についても論じたりしている。このような吉本とキリスト教との関連については、すでに笠原芳光の丁寧な紹介と検討（笠原，1988）などがあるが¹⁾、本稿は先行するそれらの業績とは異なった視点によっている。それは筆者が拙著で提示した「対象化の理論」をそこに見出そうとする視点である（宮本，2011）。対象化の理論は人間の特性や社会の形成を一貫して説明できるとともに、知識人論の基盤ともなっている。吉本は本来的に詩人であり、その著作はまさに詩的表現に満ちており、批判的な論者からは非論理的な曖昧な表現としてしか見えない。しかし、その根底を貫く対象化の理論のシンプルで強靱な展開を見出すならば高く評価できるものとなる。

まず第1節では「マチウ書試論」を取り上げる。それは敗戦後の日本で吉本が勤務先の企業での労働組合運動に挫折し、生き方を模索していた1950年代初期に書かれた聖書論である。新約聖書の四つの福音書の一つマチウ（マタイのフランス語読み）という名の信徒が記したと伝えられるマチウ書を題材に、ユダヤ体制派への過激な反逆の倫理にかかわらせて「関係の絶対性」という概念を提示したのであった。すでに宮本（2011）において、「関係の絶対性」の提唱は、認識者にせよ実践家にせよ、知識人であるならば引き受けるべき課題の宣言であると位置づけ、吉本の社会理論の基軸である対象化の理論の一端が先駆的に示されていると評価した。本稿でもその主張には変わらないが、「マチウ書試論」をめぐる今日まで続く議論の展開を紹介しつつ、著者の主張の正当性を一層強化したい。

次に第2節では、「マチウ書試論」の約20年後の1970年代後半に発表された「喩としてのマルコ伝」を取り上げよう。それはマタイ同様にキリスト伝を記したマルコという宗教的知識人について、マルコのなした言語表現であるマルコ福音書を喩という様式として解釈し、当時の歴史的・社会構造の中でのマルコの主体的な位置づけ、その内在的な思想心理を解明したのであった。

1) 1927年生まれ。宗教学者。吉本の長女である漫画家ハルノ宵子が学んだ京都精華大学の教員で、学長をも務めた。

これについては拙著ではほとんど紹介できなかったのですが、本稿においてその内容紹介と、そこにも底流している対象化の理論を明示することに努めたい。前述のように、宮本（2011）が強調した対象化の理論こそ、吉本の社会理論を正確に理解するための基盤となろう。

最後に第3節では、宮本（2011）ではごくわずかにしか言及できなかったキリスト教関連での知識人や宗教者について、本稿で増補改訂を図りたい。とはいえ紙面にも限りがあるので、特に1970年代末から90年代初めにかけて発表されたシモーン・ヴェユ論にキリスト教への言及が多いので、その要点の紹介と検討を行い、そこでも取り上げられる旧約聖書の「ヨブ記」について吉本が提示している議論も紹介したい。

第1節 初期著作と「マチウ書試論」

キリスト教ないし聖書への関心は、吉本が少年時代から親しんだヨーロッパの文学作品の影響によるものであるようだ。笠原芳光との対談で吉本はそう語っている（吉本、1988：8－11頁）。1946年頃に執筆されたと思われる「エリアンの手記と詩」や詩「異神」（吉本、1968b）にはキリスト教の影響というより、吉本が年少の頃より親しんだ西洋文学の影響があったと言明している。キリスト教的な雰囲気表現は見られるものの、キリスト教を論じているというわけではない。吉本のキリスト教への関心が表現者としての初期の時点からすでにうかがえるということとどまっている。

吉本の本格的なキリスト教論は「マチウ書試論」に始まる。それは新約聖書の中の福音書の一つ「マタイ福音書」を素材に、それを秩序に対抗する思想のドラマとして解釈した吉本の初期著作であり、1950年代前半に『現代評論』に部分的に掲載され（吉本、1954）、50年代後半に単行本（吉本、1959）に全体が収録されるに至ったものである。

「マチウ書試論」は三部構成である。まず、マチウ書の作者がイエス（ジェジュと表記される）を、敵対するユダヤ教会が拠って立つ旧約聖書の有名な

予言で示された救世主であるとし、イエスの振る舞いを旧約聖書に登場する予言者や王の事績に倣って表現しようとしていることを明らかにし、次に、悪魔との対決でイエスが示した教義ないし教理の意味を解説し、最後にユダヤ教会や秩序への憎悪の表現を紹介し、そこに抵抗する思想の不可避性との関連で「関係の絶対性」を提示している。この「関係の絶対性」が議論的となってきたが、これについては拙著で次のような私見を開陳した（宮本，2011：238頁）。

秩序に抵抗する運動ないし知識人のありかたが、新約聖書のいわゆるマタイ伝を題材に吉本によって究明された。支配体制に憎しみの炎を燃やし抵抗するキリスト一派、あるいはその伝承者たちは、数百年を経て最終的には体制を作り上げるに至るのだが、そのような運動のあり方が「関係の絶対性」に強く規定されていることを洞察し、したがって逆に「関係の絶対性」を把握することなしに、あるべき抵抗運動は可能でないと主張したのであったと言えよう。「関係の絶対性」という鍵概念に、総体のビジョンの把握という同じ頃に執筆された「転向論」（吉本，1969）と同様の基調音を聴くことができるのである。吉本にとって、外面世界と対峙する自己の内面世界を対象化し論理化する内省的姿勢こそが基本的に重要であり、本書が強調する対象化の社会理論の原点をここに見ることができる。それは吉本の転向論にも示されていた視点である。転向は社会の構造の総体を把握しようとする姿勢をとる限りは不可避であり、むしろその総体のありかたや変化に無関心なままイデオロギーを一貫させることには何ら意味を認められない。総体の把握に取り組み、自らの内面も対象化し、常に内省的に外部と内部を認識し表現することが、知識人の実践的課題なのである。自らが置かれた状況の構造的條件を対象化することこそ、秩序への反逆の倫理であり、知識人としての課題なのである。すなわち秩序への党派的な反逆の正当化の道は、秩序の構造、関係の客観性、客観的構造を解明する作業を忍耐強く続けるほかにはない。たえず自らに反省的な目を向け、自らの認識を絶えず問い直すことができない人間は反逆の資格なしと言わざるをえない。また、関係の絶対性は、主体

と構造（秩序）の関係、自らと他者との関係など諸関係の総体としての構造の客観性と言えよう。関係の絶対性の提唱は、認識者にせよ実践家にせよ、知識人であるならば引き受けるべき課題の宣言なのであった。

以上が、筆者の「関係の絶対性」論であるが、拙著では吉本の原文を引用しての具体的な論証が出来ていなかったのも、本稿ではそれを試みたい。また、「関係の絶対性」には誤解や批判的な見解も多数あるので、ここでそれらを総括し、改めて拙著における筆者の解釈が適切であることを明らかにしたい。まず「関係の絶対性」が登場する「マチウ書試論」の最終部の重要な文章を紹介しよう（吉本、1988：109-111頁）。

「加担というものは、人間の意志にかかわりなく、人間と人間との関係がそれを強いるものである。」「自由な選択にかけられた人間の意志も、人間と人間との関係が強いる絶対性のまえでは、相対的なものにすぎない。」「秩序にたいする反逆、それへの加担というものを、倫理に結びつけ得るのは、ただ関係の絶対性という視点を導入することによってのみ可能である。」「加担の意味は、関係の絶対性のなかで、人間の心情から自由に離れ、総体のメカニズムのなかに移されてしまう。」「人間は、狡猾に秩序をぬってあるきながら、革命思想を信ずることもできるし、貧困と不合理な立法をまもることを強いられながら、革命思想を嫌悪することも出来る。自由な意思は選択するからだ。しかし、人間の状況を決定するのは関係の絶対性だけである。ぼくたちは、この矛盾を断ちきろうとするだけは、自分の発想の底をえぐり出してみる。そのとき、ぼくたちの孤独がある。孤独が自問する。革命とは何か。もし人間の生存における矛盾を断ちきれないならばだ。」「原始キリスト教の苛烈な攻撃的パトスと、陰惨なまでの心理的憎悪感を、正当化しうるものがあつたとしたら、それはただ、関係の絶対性という視点が加担するよりほか術がないのである。」

以上の原文を筆者は、次のように解説し、それが前述の拙著における私見の根拠となっていた。「関係の絶対性」とは何か。関係とはたんなる人間関係ではない。関係を規定する根源的な仕組みのようなもの、構造的なものが

想定されている。人間はどんな状況でも自由に意志できる。しかし、その意志形成の条件としての根源的な仕組みや構造にまで追究しようとする人は少ない。そのような追究によってもなお意志が維持できるなら、それは正当化しうるだろう。革命思想が、そのような思想が生成される根源的な構造に反省的な目を向けることなしにありうるとしても、それは根源的な革命思想とは言えない。そのような意見は少数であろうし、孤独な考え方だ。しかし、そのような追究なしの革命思想とは何かこそが、問われねばならない。

重要なのは、「関係の絶対性」の概念が二重の意味で用いられていることだ。秩序という絶対的な関係がもたらす人間の相対性、すなわち秩序における位置づけによって意識や主張が変わりうるという相対性を示そうとして、「関係の絶対性」と表現している場合と、もう一つは、そのような秩序の基底にある構造そのものを「関係の絶対性」と呼び、そのような深層の構造を明らかにすることこそ革命の課題なのだという場合である。明らかに、「関係の絶対性」の位置づけも意味もマチウ書試論の大団円の数節の推移のなかで変容している。秩序の維持と秩序への反抗という関係性が前提であり、同じ人間でもどこに位置するかによって意志ないし意識が相対的に変わってしまうという主張から、関係をもたらす前提である秩序の成り立ちそのものを問い直し追究することによって、意志ないし意識ないし思想は正当化されうるという主張への変換が生じている。秩序という構造をめぐる思想は、秩序内の位置づけによって相対的なものであるが、秩序そのもの、構造そのものの根源、すなわち関係の総体が生成する絶対的な存在を認識し追究することによって、その思想は正しさに近づけるのだという立場である。

「マチウ書試論」は多くの誤解や、誤解に基づく批判を生んできた。実のところ、1970年代半ばまでに登場した誤解や批判的見解は日本有数の聖書学者である田川建三によって（田川、1976）総括され一掃されている²⁾。田川は、「関係の絶対性」の提示は吉本が人間の観念的構造、吉本の言う幻想構

2) 1935年生まれの新約聖書学の世界的な学者。本稿第3章を参照されたい。

造の徹底的解明への強烈な意志表明であると正しく解説したのであった。しかし田川の達成点にもかかわらず、それ以降にも「マチウ書試論」についての誤解ないし曖昧な理解は後を絶たず、2012年3月の吉本逝去後も多くの雑誌で特集号が出され、それらの中で「マチウ書試論」を取り上げた論考は意外に多いにもかかわらず、本論のような理解に到達しているものはない。また、最近出された呉智英の『吉本隆明という共同幻想』（呉、2013）には誤解による批判が述べられている³⁾。呉は徹底的に吉本を嘲弄する。そのフランス語的表記に奇妙な滑稽さを見出し、「関係の絶対性」はたんなる「関係のしがらみがそうになっているから、こうなるのも仕様がなし」といったことを言っているに過ぎない、「関係の客観性」と後に吉本が言い換えているように（吉本：1970）結局は「客観的な関係が主観を左右している」ということに過ぎないと論じている。関係を生み出す構造を明らかにしなければならないという思想的立場の宣言であることが完全に見逃されているのである。

吉本自身が『情況』（吉本、1970）所収の「基準の論理」で述べているように、「関係の絶対性」という概念で提起した問題が「幻想論の領域として確定されるために、すでに私は十数年を使ってしまった」のである。この幻想論こそ、次節で示す60年代に進められたいわゆる主要三部作によって提示されたのであった。

第2節 1970年代の「喩としてのマルコ伝」

60年代から70年代にかけての吉本について、宮本（2011）をもとに概観してみよう。吉本にとって60年代は沈潜と飛躍の時代である。安保闘争後、吉本はいわば幻想の砦にこもって思想的基盤の確立に専念する道を選んだ。60年の日米安保改定をめぐる闘争が終焉するとともに、産業化を中心トレンド

3) 1946年生まれ的全共闘世代の出色の評論家。1984年の『大衆食堂の人々』情報センター出版局を皮切りに20冊近くの評論集を刊行している。

とする産業社会論的思想が社会の主流となった。吉本は新たな社会変動に対応できない左翼運動に厳しい評価を与え、思想的理論的な修練を実践した。

吉本は、詩人で運動家の谷川雁と、歌人で文芸評論家の村上一郎とともに1960年に創刊した同人雑誌『試行』を舞台に⁴⁾、主要三部作のうち『言語にとって美とはなにか』（吉本、1965）と『心的現象論序説』（吉本、1971b）の原型となる論考を展開し、さらに同時期に『中央公論』誌上に『共同幻想論』（吉本、1968a）の原型となる論考を連載し、その他多数の文芸批評、思想論を発表した。60年代後半の騒乱の時代、左翼運動活性化の時代、青年反乱の時代、大学紛争の時代に、思想的に関心のある青年たちにとって吉本の著作は必読書となったのである。

その後、70年代に入ると吉本は、多様なテーマについて自在に議論を展開し、次々と著作を発表していく。60年代の主要三部作によって吉本は自らの理論的立場を確固たるものとし、70年代はそれを拠点に、言わば広大な戦場に出撃するようになったのである。70年代は高度経済成長の終焉とともに新たな高度な産業社会の形成が開始された時代であったが、吉本にとっても新たな対応を迫られた時代でもあった。戦後日本社会が、高度な資本主義の段階に入った時期だったのである。同時に、国内外で政治的事件が次々に起こった。文字通り世界は激動した。情況認識、世界認識を吉本もまた絶えず問い直さねばならなかった時代であった。評論集『情況』（吉本、1970）を刊行し、『試行』を舞台に「情況への発言」を連載し（吉本、2011）、それと並行して、『心的現象論序説』（吉本、1971b）を刊行し、その後も「心的現象論」の『試行』連載を継続し（吉本、2008）、さらには『源実朝』（吉本、1971a）や『初期歌謡論』（吉本、1977）などの古典文学評論や『戦後詩史論』（吉本、

4) 谷川雁は1923年生まれで1995年に亡くなった詩人にして評論家、そして運動家・経営者、村上一郎は1920年生まれで1975年に自死した歌人、評論家、小説家。谷川は左翼の立場、村上は日本浪漫派的立場という違いはあったが吉本を基軸に結びついた。

1978b)などの詩論を相次いで出版した。また、『書物の解体学』(吉本, 1975)という海外の文学者ないし思想家たちについての評論集も吉本としてはユニークな試みであった。そして、「喩としてのマルコ伝」を親鸞論と共に収めた『論註と喩』が1978年に刊行された。「マチウ書試論」以来20有余年、再び新約聖書が取り上げられるに至ったのである。吉本はマタイ同様にキリスト伝を記したマルコという宗教的知識人について、その言語表現であるマルコ福音書を喩という様式として解釈しつつ、そこに対象化による内面世界の確立を読み取った。なお、この「喩としてのマルコ伝」が発表される前年の1977年に吉本は講演「喩としての聖書」を行っていた(吉本, 1988)。これは「喩としてのマルコ伝」を準備している中でのものであり、その要旨を良く伝えているので、まずその紹介から始めよう。

まず「言葉から新約書をみたらどういうことになるのか」という問題が設定され、「マチウ書試論」同様、思想書として新約書の福音書マルコ伝を読むということは、信仰の外部から境界を絶えず出入りしつつ検討することであるという視点が提示される。こうして吉本は、思想書としてのマルコ伝の要点をまとめていく。第一の要点は、人間の存在が、一人の個人としての人間、父母兄弟や友人などとの多様な対関係における人間、そして社会や共同体のような共同性のなかでの人間という、個体幻想・対幻想・共同幻想の基本的三次元を踏まえているということ、さらにはそれらが相矛盾し対立するということを表現しているという点である。これこそ吉本が60年代に構築した幻想論の基本的構図そのものである。第二の要点は、集団を形成する人々、いわば同志たちが、同じことを信じているからといって、そのような平面的一次元の関係性のみによって集団が成立しているわけではなく、人間はある普遍的な矛盾を抱え込んでいることを表現しているという点である。これは前述の存在の三次元を前提に同志ないし同信の関係が成立しているということの意味している。第三に、自分自身について、自分が自分に問い、自分が自分に対面するという場合に、人間は自分自身を信じきれない存在であることを表現しているという点である。すなわち、自分が自分自身によって疎外

される存在、内面的な世界を生成しうる存在、絶えず自らを問い直さざるを得ない存在であることを言い当てているという点である。

そして以上の三点が、いわば不信の構造であるとすれば、信の構造として第四点として、聖書のなかで信じられていることは何かと吉本は問い、それは言葉ではないかと議論を進める。イエスの奇蹟は暗喩であり、本来ならあまりにも意味やイメージが隔たる言葉を結びつけている。それが言葉から見た奇蹟である。結びつけが不可能な対象が、言葉に対する信仰によって奇蹟が生れ、暗喩として結びつけ可能となる。言葉がわかるということは、喩がわかるということであり、喩が理解できるということが信じているということなのである。喩はたんなる言葉の表現上の飾りではない。暗喩ないし喩でしか教義を残せない段階、喩でしか表現できない時代があったと吉本は見る。マルコ伝の暗喩は新しい時代のもが多いが、発生 of 時代における暗喩もわずかに残存している。

以上が、講演の要旨である。これをさらに詳細に展開したのが「喩としてのマルコ伝」であり、それは6つのパート、すなわち「教義」、「治癒」、「核心」、「暗い」、「教理」、「言葉」からなる(吉本, 1978a)。そこには宮本(2011)で明示した対象化の理論、すなわち対象化による内面的世界の確立という視点が明示されている。順次明らかにしていこう。

「教義」では罪の内面化、あるいは内部世界の確立がマルコ伝においてなされたことが示される。犯罪人、取税人、廃疾者、貧困者が社会的な存在から、罪を負った内在的な存在の象徴、すなわちすべての人間が負う罪を意味する存在に転化した。それらの人々に暗喩の役割を負荷させ、罪とか病とか貧しさという具象的概念は、内在的な普遍化をうけて二重化される。マルコ伝の世界の感性的な異様さは、犯罪人、取税人、廃疾者、貧困者が過去から負った罪の報いとして疎まれた社会的な存在と見られていた時代の言語と、人々が大人なり小なり自分自身を疎ましい存在とみなす内面性をもたざるを得ないと考えようになった時代の言語という二つの系列の言語の併存による。人間の内面の方が外面よりも重要なのだという判断、外面的なものは人

間にとって無意味だとする解釈、鋭い内省的な意識、罪概念の内在化、が示されていると吉本は解説する。

「治癒」ではその内面化された罪、内面の疾しさをいなく内部世界の成立と、その内面性への治癒としてのイエスの行いがあることが示される。イエスは不可能を象徴する病気を治癒させる。治癒とは罪が許されることであり、普遍的人間的な罪が許されることであり、人間の内在的根拠のすべてにわたる容認である。すなわち、人間の普遍的な根拠である罪にたいする特赦の暗喩となっている。病気が罪の暗喩であり、罪は人間の内在的な根拠である。すべての罪を一身に背負い身を滅ぼすキリストが行うのが治癒行為であり、そこに救世主メシアの喩的な意味が示される。内在する罪とその治癒という視点であり、罪こそはマルコ伝の発明なのだ。現実的な秩序と分離したところで別の観念の秩序が組み立てられる。神の国は自己意識のこしらえた至上空間、あるいは空間的に至上化された自己意識そのものなのである。以上のように、マルコ伝から抽出することのできる教義的なものは、喩的な流れに終始しているが、この教義的なものに状況の生々しさが加わると、教義的なものから思想的なものへ、喩から直叙へと変貌していく。

「核心」においては「マチウ書試論」でも強調されていた関係性の生々しさがイエスの精神性を打ち消すという、いわば背反の心理学が語られる。主人公をとりまく親和的な人々は、主人公が死に追い込まれる過程で次々に離反せざるをえなくなる。そのとき演じられる内的な劇は人間にとって本質的である。初期のキリスト教団マルコ派はローマの秩序とユダヤ的秩序の二重の圧制と迫害のもとで、ときに潜行しときに内部分裂や背反にさらされながら布教活動をつづけていた。近親は近親であるがゆえに、信の共同性と敵対し憎悪をむきだしにして立ちふさがる。性的な親和と禁忌を介しての関係性において、自分を生理的な分割としてみる母や、第一次的な性の親和と禁忌として現れる同世代的な存在としての兄弟姉妹がいる。知恵とか能力とかいうものは、近親者やその関係の拡張である故郷では背後に隠される。故郷は血縁共同体が占める場所であり、地縁共同体としてもそれは存在する。宗教

は近親性のもつ親和と禁忌とを、超越者との関係に置き換えることを強いる。そのため自己意識が分裂し、その軋みが自己倫理となる。新約書に登場する人々は、道徳と内面性を自らの内部にもった最初の人々であると吉本は位置づける。躓くことは内面性の明証である。誰でも自分だけは別物だと考えながら、実は自分が自分に対して他者になってしまう。特に人間と人間が共同意志をもって結合しているとき、背信、矛盾、背反と対立が起こる。自分の言葉を自分で規範化したために起こる背反はペテロの背反、イエスの言葉を教義的な規範に追いやったことによる背反がユダの背反、そして神を規範に追いやったために起こる背反が主人公イエスの背反であろう。共同意志は架空の共同性であり、人間が自らを観念だけの存在と思いなす度合いの強さによって成立する。架空の共同性、すなわち共同幻想のもとでは、人間は自己がいつも自己に折り合わないという体験をもち、人間はおのれに背くことによってしか生きられない存在となる。

「暗い」ではマルコ伝全編をおおう暗い構図の暗さの秘密が、内面性の確立に伴い内部世界が外部からの刺激を受け止めるところにあることが示され、暗さの根源にある旧約書の教義ないし言葉への問いがなされる。「暗い」とは、内的な受容の過剰、過剰な受け入れの傾向がもたらす。自分が自分に遅れるかもしれない混沌とした内面を抱えていると、暗いという感性が成立する。内的な暗さとは、「暗い」が内在性として分離されて成立する。そしてそこに罪の起源もある。共同体の意志を規範化した度合と質が、罪の意識の度合いと質を決定した。共同体の意志の直接的な強力な規範力のまえに、いわば永続的におびやかされたものの明晰な直接的な罪の内面化の物語が展開する。イエスの死に至る過程は、イエスの自分自身への不安や不信や背反の過程と交錯して描かれる。イエスは死の予感に怯え、自分自身に不信感をもち、自分自身に背反することへの不安をいだいたのである。以上のように論じた後に吉本は、主人公イエスよりも長く生き続けるものは何か、それは教義だろうか、それとも旧約書の言葉だろうか、という問いを設定する。

「教理」では、マルコ伝が教理としてはとるにたりの記述の個処を持たな

い幼稚な話の集積にすぎないが、経験を思想の型にまで高める鋭い洞察力が言葉として表現されていると吉本は指摘する。幼稚と叡知が混在し、露骨に失敗した喩の全体、生々しい経験のもたらす現実感、荒唐無稽な再臨図絵などが奇妙な結合を見せている。しかしながら、そういったマルコ伝の言語表現は、そのように把握され対象化された世界を、言語表現として対象化（外化）したものであり、一度は完全に対象を外化したからこそ、マルコ的な世界は自由な思考を手に入れたのであろう。マルコ的な世界の教理を生き永らえさせた真の理由は、対象化（外化）された後の過程における復活と再臨と同じ型の思考ではないだろうか。ともあれ、最後にマルコ伝が信じなければならなかったのは、「天地は過ぎてゆくだろう。けれどもわたしの言葉は過ぎてゆかない」というイエスの言葉に象徴されるものであったと吉本は見る。

その言葉が、最終パート「言葉」で検討される。イエスの言葉を信じること、そのような信の状態こそが喩としてのマルコ伝を根源的に支えていた。旧約書の予約の言葉によって生きさせられたイエスが、自分の言葉を語り、自分の不安や不信によって死ぬ物語には、作為的に意図的に創りだされたイエスが、たんなる語り手の操り人形から、見事な言葉をじぶんで創りだすまでに至る過程が表現されている。イエスのなした奇蹟とは特異な喩の言葉であり、言葉が成就するゆえに現実は成就する。その言葉は、全く異質でまったく結びつきそうにもない二つの対象概念を結びつけうる言葉である。イエスは全ての人間の廃疾を一身に負荷された者であり、不信や罪や穢汚の暗喩としての廃疾をわが身に吸収することで即座に治癒を可能にした。そのような喩の能力が低下しそれが理解されなくなった現在では、奇蹟は不可能となった。イエスの時代には、喩を喩で応答することによって信仰の深さが示されたが、そこには暗喩の持つ時間の累積、言語体験の不可避的な累積が秘められていたのである。

以上のように「喩としてのマルコ伝」の中に、対象化の社会理論を見とることができる。第一に対象化の作用による人間の内面的世界の構築、内面に反省的な目を注ぐ人間の対象化が描かれている。人間存在は対象化作用に

よって動物とは一線を画し意味の世界を構築してきた。社会的にも共同体の並列と重層化によって大きな社会の構築が進み、一定の秩序が構築されたのであるが、そのような外面的な秩序の構築とは別に、それと拮抗しうる水準と質をもった内面世界が産み出され、それらは一定の共同性を獲得するに至ったのである。吉本はそのような内面化のドラマを、60年代に確定した対象化の理論（宮本，2011）の視点によってマルコ伝に見出したのだった。第二に、なぜ「喩としての」であったのかというと、ちょうどその頃『初期歌謡論』に結実した考察が吉本によって進められており、そこでは喩が中心概念になっていたことを指摘できよう。60年代の『言語にとって美とはなにか』の喩論は高度な言語表現としての喩論であったが（吉本，1965），『初期歌謡論』の喩論はとくに枕詞論との関連で展開されており（吉本，1977），吉本は高度な言語表現としての喩は，原初的な言語表現においても重要な機能をはたしていたと考えるのである。吉本はそれを虚喩とよぶ。高度な言語表現としての喩以前の喩である。表現の高度な技法としての喩ではなく，喩でしか表現できなかった段階の事象がマルコ伝には盛り込まれていると吉本は見える。喩の成立は言語にとって奇蹟である。無関係の対象を指示する言語が，表現上結び付けられる。二つの対象化を結びつける対象化としての喩であるが，原初の喩はその結びつける対象化の原点が反省的な意識としての自我ではなく，いわば虚点であるため，吉本はそれを虚喩と命名したと考えられる（吉本，1977：224-63頁）。第三に、『共同幻想論』（吉本，1968a）によって獲得された共同体ないし共同幻想の重層化についての視点と，相互に対象化し合う個体幻想と共同幻想という視点が「喩としてのマルコ伝」に生かされている。ここにもまた60年代の吉本の理論的研鑽が結実しているのであった。

第3節 キリスト教と知識人

吉本は80年代に，キリスト教に深くかかわった思想家であるフランスのシモーヌ・ヴェイユについての講演やエッセイを発表し，それらは90年代に

入ってから一書にまとめられた。また、吉本とキリスト教とのかかわりについての主要な論考が収録された『〈信〉の構造 2 キリスト教論集成』（吉本，1988）が1988年に刊行され、そこに収められた笠原芳光による吉本へのインタビュー「現代キリスト教思想の諸問題」がいわば回顧と展望となっていた。そこには、キリスト教に影響を受けた日本の作家や批評家、さらにはキルケゴールのような思想家や、後述の千石イエスのような宗教者についての言及も多く見られ、吉本のキリスト教への関心の広さがよく示されていた。本節では、主としてヴェイユ論の紹介と検討を行い、対象化の理論および知識人論との関連を明らかにしたい。

1992年の『甦るヴェイユ』の要旨は、1979年の講演「シモーヌ・ヴェイユの意味」（吉本，1988）に示されている。吉本はヴェイユの人生と思想をまず概観する。学生時代のヴェイユはシモーヌ・ド・ボーヴォワールが描く世界中から飢えた人間を一掃する革命を目指すヴェイユであり、中期のヴェイユはジョルジュ・バタイユが描く疫病神のように不幸と共にしか存在できず、スペイン内乱に参加して自分を故意に追い込むようなヴェイユであり、晩期のヴェイユは、スーザン・ソントグが描く自己犠牲への極端な嗜好、幸福や安楽への根拠のない侮蔑、崇高だが馬鹿げた大仰な政治的身振りが一層強まったヴェイユである。大学を出て女子高等中学の哲学教師をしながら、ヒトラーとドイツ共産党の同一性、一国社会主義国ソ連のドイツ労働者への裏切り、ロシア革命の失敗などについて真剣に検討を重ね、ソ連は資本主義社会同様の労働者を抑圧し管理する体制であるという洞察を得るに至り、また管理機構の機械に支配されるように、戦争では労働者は機械に殺されるという視点を確立した。戦争への徹底した批判であり、革命への絶望感であり、同時に思想にも絶望的になり、そこから神に飛躍し、個人の自由、個人の解放を祈るに至る。また思想への絶望感から労働者そのものに変身し、工場体験による労働者の苛酷な状況への対応を知るに至り、そのような対応を肯定的に受容しとする。

ヴェイユの人生と思想に吉本は批判的だ。知識ないし知識人の課題は、無

際限に拡大する能力と想像力を行使する自由であり、知識ないし知識人にとってもっとも重要なことは、現在にあって考えられる限り無限大に感じ、無限大に想像力を働かせ、無限大に考えるというところにある。知識をもつこと、知識人であることに対して罪悪感をもつことは間違っている。知識人の課題は、より大きな自由、より大きな感受性、想像力、思考力によって既成の知識を包括し、克服するということ以外にない。

しかし、ヴェイユは労働体験の末期にカトリックの恩寵、救済、神の認知の思想について考察を深める。吉本は貴種流離譚ととりかえばや物語という原型のパターンをもつ民話へのヴェイユの打ち込みが宗教的なものへ導いたのではと考える。貴種が身をやつすように神は人間に近づき、やがて人間は神を認知し恩寵に気づくパターン、また、神は身をやつし、最初は気づかれず、ついに認知されるというパターンを、ヴェイユは神の来訪のパターンと同一視したと吉本は見る。

ヴェイユは、完全な絶望状態、徹底的な自滅にまで自らを追い込んでいく。まさに、死の中にしか真の自由は存在しないというところまでである。反ナチスの戦いの中で死ぬための計画を立てるが、その不健康で病的な計画は周囲から反対され実現できなかった。労働や死は神からの刑罰であるとヴェイユは見なすが、その労働は自らの意志により自らの喜びとなり、死もまた自発的に意識的に受容可能となると考えていた。そして最後は拒食状態となり餓死同然の死を迎えた。悲惨な人生というほかはなく、吉本はそのような人生をもたらした彼女の思想に批判的であるが、ヨーロッパ近代の達成点をどう考えるかという困難な課題に激突し、全身全霊でその問題に取り組んだヴェイユの苦闘の跡を見て取り、彼女の知識人としての生き方を高く評価する。

以上が講演の要旨である。反ソ連論、反スターリニズム論をその頃積極的に展開していた吉本は（吉本、1982）ヴェイユがソ連に批判的であったことや、時代がもたらした困難な課題に真剣に誠実に取り組んだことは評価するが、労働への劣等感や倫理的なやせ細りについては評価しない。しかし、ヴェ

イユが神を体験し、カトリック思想に接近したことについての意味を探究しようとした。そして、その講演の13年後出版された『甦えるヴェイユ』(吉本, 1992)では、それが一層詳細に論じられている。それは「初期ヴェイユ」「革命と戦争について」「工場体験論」「痛みの神学・心理・病理」「労働・死・神」「最後のヴェイユ」から成り、キリスト教との関連の議論は後半の三つの章で展開される。ただし、「工場体験論」の終わりに、不幸についての考察から神概念が生まれる経過について次のような記述がある。

吉本はヴェイユの展開する管理社会論とそこに組み込まれた労働者像は時代遅れだと判定するが、彼女が工場体験からつかみとった感覚と精神の働きは現在でも無効ではないとして評価する。ヴェイユの感覚と精神には激しい頭痛への忍耐と宗教的要素が絡み合っている。人間が侮辱するもの、嫌悪や憎悪を感じるものは、すべて不幸が産み出したものであり、人は意識せずに不幸な人をどこかで侮辱しており、不幸な人は自分自身を侮辱し、嫌悪や憎悪を自分にいただき、魂の中心にしみこませ、その毒は宇宙全体を彩るが、それを防げるのは神の超自然的な愛のみであるとヴェイユは考える。神と神の子キリストとの距たりの中に、不幸と言う概念が潜んでおり、神は時間と空間の外側に、すなわち被造物の世界の外側に存在する。そのような神を信じながら、ヴェイユは教会に属することを拒む。信仰の理念の閉所に閉じ込められることへの恐怖症であり、教会が不可避的に持たざるをえない地上性(社会性)と反知性への拒絶である。ある意味では病的な内向性の現れであり、精神の縮小であり、被虐的な思考の展開とも言えよう。この精神の働き方は後述の旧約書のヨブ記の世界のものと類似していると吉本は考える。

以上を受けて「痛みの神学・心理・病理」「労働・死・神」「最後のヴェイユ」では神秘体験、信と不信、独特の神学、不幸、ヨブ記について述べられる(吉本, 1992)。痛みの中での修道院での礼拝中、大戦間近の1938年にヴェイユは神秘的な体験をした。肉体離脱の幻覚と、触神ないし見神の体験であり、それは如実感と存在感をもってヴェイユによって語られる。次に「労働・死・神」では苦痛から神へ、自己抹殺の願望から神への通路が明らかにされ

る。ヴェイユの神は自然を支配する理性的な存在であり、神と自分は二律背反関係になるとされる。すなわち、神は人間が存在する世界の外にあり世界を存在させ、人間存在は神から投影された影にすぎない。しかし、ここにヴェイユのヨブへの深い共感が示される。ヨブこそ、人間が神への服従の外に出ることの可能性を示したのではないか。人間がかかわれる世界の外側に、人間の能力のとどかない領域に、神の實在性の領域があるのだが、人間的な倫理の矛盾を武器に神に抗弁し、神の不公正をなじったのが、旧約書の偉大な受難者ヨブなのではなかったか。そして「最後のヴェイユ」では、宇宙の美を創った神は被造物の世界の外側に存在し、それが宇宙なのだとヴェイユは考え、善の本質は神からくる善であり、あらゆる人間は善の可視的な象徴であるとする。神の位置の實在性と、人間の位置の幻想性が対比される。そのようなヴェイユの神学思想の核心は自己無化ないし自己抹殺であり、死のナルチシズムとヒロイズムが同居し、前述のように不幸で不健康な死の計画さえ立案させたのであった。

そのようなヴェイユに吉本はなぜ関心をもち、80年代に検討を進めたのか。前述のように彼女がスターリン主義と激烈に敵対したことが、ヴェイユ論執筆時の吉本の国家社会主義批判と同調したというだけではなく、70年代から展開されていた親鸞論（吉本、1976）で提示した親鸞と同様の姿勢をヴェイユに見出したからにはほかならない。すなわち大衆との関係性の反省的認識と、神なき宗教という姿勢である。時代のいわば関係の絶対性に正面からぶつかりその痕跡を自らの表現に残したヴェイユは、信と不信の価値関係を、信は不信以下であると逆倒し、知識的上昇（信を深めること）は不信よりも価値があるわけではないという立場を鮮明にしたのである。

また、革命思想家ヴェイユが、後期にはキリスト教の敬虔な信者となったことを吉本は次のように評価する。それは吉本の「転向論」（吉本、1969）において提示された独特の評価基準に基づくものである。吉本は転向か非転向かという区分には意味を認めない。ここでもやはり対象化の水準が問われる。自らの内部世界と対峙し、対象的に把握し、問い直し、その果てに訪れ

た思考転換なのか、たんに外部世界の変転や影響で内面的な深まりなしに転向したかの差は大きい。吉本はヴェイユがそのような内面の深まり、内部世界を外部世界とのかかわりの中で対象化し問い直していく中で、いわゆる革命思想からキリスト教への思考転換を成し遂げたと見なすのである。

吉本は『甦えるヴェイユ』刊行の翌年、芦屋市で笠原芳光の主宰する集会で講演「シモーン・ヴェイユの現在」を行い（吉本、1997）、また、96年には講演「苦難を超える—『ヨブ記』をめぐって」を行っている（吉本、1997）。ヴェイユについての講演は、刊行したヴェイユ論の要点を述べたものであるが、ヴェイユ論でも言及される旧約書の「ヨブ記」について語っているのが「苦難を超える」なのである。「ヨブ記」は善い人の災難の話である。神に敬虔な富者ヨブも不幸を極めれば不信心になるだろうと悪魔は神に挑戦し、神は悪魔がヨブを不幸にするのを黙認する。ヨブを筆舌に尽くしがたい苦難が襲う。それでもヨブは神を捨てない。しかし、ついにヨブはなぜ自分が苦難に会うのかと神に問う。それに対する神の回答は、神に疑念を抱くヨブの小ささを責め、そして神の万能を自慢する。神の万能は自然としての万能性にすぎないが、ヨブは神に詫び、神はヨブの身体と生活を回復させる。このようなヨブ記には可能性が秘められていると吉本は見る。ヨブ記の成立過程には人々の思索が込められており、現在残されているヨブ記はその一つの現れにすぎず、ヨブ記の続編ないし異説がありうる。吉本は神から自立した人間の誕生、人間的倫理の誕生をヨブ記が示すというヴェイユの説に賛同する。神は自然に過ぎないのだ。そのような神を前提にし、苦難を超える精神を人間は樹立しなければならない。吉本はここに普遍宗教と普遍倫理の課題を見出す。そこには、人間が欠如からではない倫理への道を開発する可能性が示されているというのである。ヨブ記を文字通り解釈するなら、それはヴェイユ論でも述べられていたように、被虐的な精神の現れにすぎないと吉本は考えるが、そこに見出すべきは宗教的共同性に取り込まれることのない神への信仰、田川建三の指摘する不在の神に祈る姿勢なのである（田川、1971）。

日本の聖書学者の第一人者と目される田川もまた、キリスト教の信者であるか否かとは無関係に、キリスト教知識人というべきであろう⁵⁾。吉本は田川に大きな影響を受けていると筆者は考える。もちろん「マチウ書試論」は田川とは無関係であり、むしろ田川がその影響を受けていた（田川、1971）。その後、1950年代後半から1960年代にかけての10数年を費やして吉本はいわゆる三部作を仕上げ、田川は聖書学者となり聖書研究を深めつつも、60年代後半の大学紛争の中で職を奪われ、海外での研究生活を展開することになり、そして1970年代にアフリカのザイール（現在のコンゴ民主共和国）での教員生活を切り上げて帰国した（田川、1976）。こうして70年代から80年代にかけて、吉本と田川の新たな関係性が展開することになった。田川は、吉本が左翼批判を徹底させ、運動や実践家への激烈な批判を展開していくことに大きな異和感をもつようになった。そしてついに、田川の『イエスという男』に対する『週刊読書人』1980年4月28日号の吉本の書評「反逆は内向する」（吉本、1988）が両者の決別の契機となったと思われる。

「反逆は内向する」において吉本は、田川たち聖書学者は歴史的イエスの実在性への問題関心をいだが、それはあまり重要な意味をもたないと述べる。実在性にこだわり追究していくと、それらのすぐれた文献学的、歴史学的検討によってありふれた味気ない一人の政治的抵抗者反逆者イエスが現われてしまうからである。それは権力に反抗し逮捕され殺された古代オリエンタル的反逆者像である。ガリラヤ人イエスにとってエルサレム神殿を中央とするユダヤ教的な神政権力が直接の支配者であったというイエス時代のユダヤ地方における政治的支配の構図を、田川が精密に描き出していることは評価するものの、吉本はむしろそのようなイエスを題材に創作された思想書としての福音書をいかに解釈するかを重視する。福音書の記述のなかでイエスの言動の実在性を支えているのはどういう箇所か。それはイエスの心証的な実

5) 田川建三の人生については「ロングインタビュー田川建三（聞き手：湯川豊）」（『考える人』2010年春号、新潮社）を参照されたい。

在性であり、生きた内面を持った無類の反逆の倫理を史上初めて開示した思想家としてのイエス像である。吉本は「マチウ書試論」や「喩としてのマルコ伝」で提示したように、福音書から内向する意識ないし認識を取り出し評価する。観念の王国の無限性を現実の秩序とは逆立するものとして設定した思想は、人類史上福音書が初めて提示し、観念世界の無限の奥行を人類にもたらしたと考える。

以上のような見解には吉本の左翼嫌い、実践家・運動家嫌いが顕著に示され、それは田川にとって不当な評価と感じられたろうし、吉本の評価軸が安直にすぎるのではないかと思われたのであろう。80年代初めの『「反核」異論』（吉本、1982）もあって、田川の吉本への批判的意識は一層強まり、雑誌『インパクション』を舞台に吉本批判を本格化し⁶⁾、それは87年に『思想の危険について—吉本隆明の軌跡』としてまとめられたのであった。

さて、吉本はキリスト教の影響を受けた文学者、芥川竜之介の「西方の人」、太宰治「駆け込み訴え」、文芸評論家から聖書研究者となった井上良雄、カソリック信者の小説家である小川国男の作品なども論じているが（吉本、1988）、紙幅の関係もあり本稿ではこれ以上の言及は控えよう。ただ最後にキリスト教団体主宰者である千石剛賢（千石イエス）について簡潔に触れておきたい。千石剛賢はイエスの方舟という小さな宗教団体の主宰者であった。彼は女性信者の家族からの訴えで警察に追われることになり、当時の日本ではいかがわしい宗教者として一時は見なされた。しかし、その実態は女性たちが自らの家族に耐え切れずそこから逃亡し、千石が彼女たちを受容し、訴えた家族から逃亡する女性たちに千石が付き添ったということであり、千石のユニークな宗教者としてのありかたがその後知られるようになると、社会的にも再評価されるに至ったのである。吉本もまた、千石が受け身の宗教者

6) 田川建三の吉本批判の正しさと、それとは別様の吉本評価の可能性については、宮本（2011）の第2章、第7章、第10章を参照されたい。なお、宮本（2011）では「健三」と誤記していることを、ここにお詫びして訂正いたします。

として、聖書のみに拠りつつ、しかし知識的上昇を求めず、宗教の解体寸前のところで、信仰の共同性を実現していったことを知識人のあり方として高く評価したのである（吉本、1988）。

おわりに

本稿は、拙著『吉本隆明の社会理論』の第10章第3節「知識人論としての宗教者論」の補遺として、吉本のキリスト教ないしキリスト教知識人についての議論の展開を一層詳細に紹介すること、そして、それらの議論の中に拙著で提示した、吉本の著作に一貫している対象化の理論を見出すことを目指してきた。最後に本稿の達成点を確認しておこう。

第一に本稿が明示できたのは、「マチウ書試論」の有名な概念「関係の絶対性」を、秩序の関係性の構造と、秩序の構造の基底ないし深層にある関係性の構造との二重性によって把握する視点こそが、「関係の絶対性」をめぐる議論の適切な理解を可能にするということである。批判的な論者の多くが示す誤解もそれによって一掃できる。そして後者の構造を対象化し、幻想論としてそれを解明することが吉本の60年代の課題となり、個体幻想（自己幻想）、対幻想、共同幻想についての理論的検討が進められたのであった。

第二に70年代の「喩としてのマルコ伝」について、人間の内面的世界の対象化、内部世界の構築という、対象化の理論の基本的原理がそこには一貫していることを明示できた。吉本は人間が対象化の累乗によって内部世界を構築し、自らに対象的、反省的になることを重視しており、人類史的にその展開における画期的な段階をマルコ伝の世界が示していることを指摘したのである。また、「喩としてのマルコ伝」には、60年代の幻想論の成果が込められており、また、『言語にとって美とはなにか』を基盤として70年代後半に出された『初期歌謡論』の喩論の展開が反映していることも示すことができた。

第三に本稿が明らかにできたのは、吉本がシモーヌ・ヴェイユを評価する

根拠が、知識人の対象化の課題への対応に求められるということであった。吉本はヴェイユの思想的変遷、キリスト教信仰への独特な思考転換に、知識人が自らの直面する課題に全力で取り組み、自らに対象的な内省的な視線を確保しつつ新たな地点を求めて進む姿を見出し、また、信仰の世界に入りながらも共同幻想を対象化する个体幻想を維持し、さらには信じないことの意義を洞察するに至ったことを評価するのである。

さて、本稿が捧げられる滝澤教授は年季の入った聖書学者であり、とくにマルコ福音書研究で著名である（滝澤 1995, 1997, 2001, 2006）。そのような専門的研究の視点からすると、たとえ吉本といえども、いわば門外漢の勝手な聖書解釈であり、とんでもない誤読である可能性を否定できない。最近でも、社会学者の橋爪大三郎と大澤真幸の共著『ふしぎなキリスト教』（橋爪・大澤 2011）をめぐるいわゆる「ふしきり論争」が起り（ふっす連 2012）、聖書研究者から見れば根拠のない勝手な解釈に基づく思い込みの議論が展開されているとして厳しく批判されている。それは言わば文献学的に見れば誤った自在な解釈だが、その解釈自体に価値が認められる「創造的誤読」の意義をめぐる問題である。本稿もまた聖書の文献学的研究を一切しないままでの議論の紹介と解釈であることを認めざるをえず、その点について滝澤教授のご寛容を乞う次第である。

参考文献一覧

- 橋爪大三郎・大澤真幸（2011）『ふしぎなキリスト教』講談社現代新書。
- ふっす連＝ふしぎなキリスト教問題を考えるツイッター市民連合編（2012）『ふしぎな「ふしぎなキリスト教」』ジャーラム出版。
- 笠原芳光（1988）「解説：吉本隆明における聖書」吉本（1988）所収。
- 小浜逸郎（1999）『吉本隆明』筑摩書房。
- 宮本孝二（2011）『吉本隆明の社会理論』晃洋書房。
- 田川建三（1971）『批判的主体の形成—キリスト教批判の現代的課題』三一書房。
- 田川建三（1976）『歴史的類比の思想』勁草書房。

- 田川建三（1987）『思想の危険について—吉本隆明のたどった軌跡』インパクト出版会
- 滝澤武人（1995）『福音書作家マルコ思想』新教出版社。
- 滝澤武人（1997）『人間イエス』講談社現代新書。
- 滝澤武人（2001）『イエスの現場—苦しみの共有』世界思想社。
- 滝澤武人（2006）『マルコの世界—イエス主義の源流』日本基督教団出版局。
- 吉本隆明（1954）「マチウ書試論」『現代評論』12号。
- （1959）「マチウ書試論」『芸術的抵抗と挫折』未来社。吉本（1988）所収。
- （1964）『初期ノート』試行出版部。
- （1965）『言語にとって美とはなにか』（2巻本），勁草書房。1982年に角川書店より改訂新版。
- （1968a）『共同幻想論』河出書房新社。1982年に角川書店より改訂新版。
- （1968b）『定本詩集 吉本隆明全著作集1』勁草書房。
- （1969）『政治思想評論集 吉本隆明全著作集13』勁草書房。
- （1970）『情況』河出書房新社。
- （1971a）『源実朝』筑摩書房。
- （1971b）『心的現象論序説』北洋社。
- （1974）『詩的乾坤』国文社。
- （1975）『書物の解体学』中央公論社。
- （1976）『最後の親鸞』春秋社。
- （1977）『初期歌謡論』河出書房新社。
- （1978a）「喩としてのマルコ伝」『論註と喩』言叢社。
- （1978b）『戦後詩史論』大和書房。
- （1980）『世界認識の方法』中央公論社。
- （1982）『「反核」異論』深夜叢書社。
- （1987）『超西欧的まで』弓立社。
- （1988）『〈信〉の構造2 キリスト教論集成』春秋社。
- （1992）『甦えるヴェイユ』JICC出版局。

——— (1997) 『ほんとうの考え・うその考え—賢治・ヴェイユ・ヨブをめぐって』 春秋社。

——— (2008) 『心的現象論本論』 文化科学高等研究院出版局。

——— (2011) 『完本情況への発言』 洋泉社。

吉本隆明・笠原芳光 (2006) 『思想とはなにか』 春秋社。

Takaaki Yoshimoto and Christianity

Koji MIYAMOTO

Takaaki Yoshimoto, who died in 2012, was one of most influential critics and thinkers in various fields in modern Japan. He was interested in Christianity and wrote several papers that examined social theoretical points through the lens of Christianity. Although my book *Social Theory of Takaaki Yoshimoto*, published in 2011, attempted to explore the social theories in his many works, my study did not thoroughly and deeply go into his works concerning Christianity. This paper aims to enlarge and revise the discussion begun in my book. First, I clarify how Yoshimoto found the basic task of intellectuals resisting the establishment in his work concerning the Gospel according to Matthew. Second, I show how he found the birth of an internal world brought by rising to a high level of reflexivity in the Gospel according to Mark. And third, I clarify the reasons why he highly respected from the viewpoint of an intellectual, the French female philosopher of Marxism and Catholicism, Simone Weil

Keywords : Takaaki Yoshimoto, Christianity, Gospel according to Matthew, Gospel according to Mark, Simone Weil